8）ＪＩＣＡラオス森林保全・復旧計画（ＦＯＲＣＡＰ）フェーズⅡ視察
(The Forest Conservation and Afforestation Project: FORCAP)

ヴィエンチャン県ヴァンビエンにあるＦＯＲＣＡＰ事務所にて圓谷浩之チーフアドバイザーからプロジェクトについてのオリエンテーションを受け、事務所に併設してある紙布織・紙梳き場とその直売所を見学した。**（写真 17）**ＦＯＲＣＡＰでは、「森林を通して人が幸せになること」を大目標に、主に①焼畑地の復旧、②住民が焼畑をしないよう啓蒙、③収入向上の 3 活動を住民参加型方法で実施している。森林技術の普及と住民の組織作りが課題である。

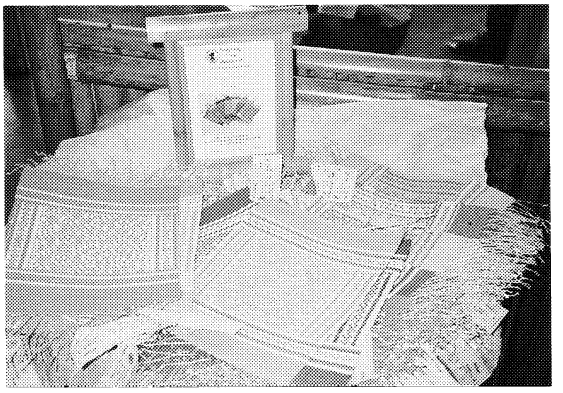

写真１７．紙布織の作品

バンロンキー村では森林技術研修に参加した村人が、研修で学んだことと自分の知識と経験を活かして独自の植林方法を展開していた **（写真 18）**。ＦＯＲＣＡＰが薦めたチークは間伐してしまい、代わりにサパーンを残し育てるなどプロジェクトにとっては意外な展開をしているが、ＦＯＲＣＡＰは彼の努力と応用力を高く評価、この地域で成功できる例として取り上げ、先進地視察や情報交換の場でこの事例を挙げている。試験場で成功したものを普及するのではなく、土地にあったもの、住民の意見を尊重していこうとするプロジェクト側の姿勢が伺えた。

写真１８．バンロンキー村の植林地

バンフア村では 1.6ha の学校敷地のうち、1 ha を学校林として 1999 年からＦＯＲＣＡＰの支援を得て植林を始めた。バンフア村はＦＯＲＣＡＰの点在するプロジェクト地を結ぶ道路沿いに位置し、ＦＯＲＣＡＰ直接のプロジェクト対象地内にはないが、村長や校長が特に熱心な人たちで、実行力も伴っていると判断したＦＯＲＣＡＰは、その熱意を受けて学校林を始めることになった。植林作業は村人と生徒が一緒に行った。補植は生徒がしている。植林地はもともと牛の放牧地だったところなので、自然と牛が入ってきてしまうためフェンスをして牛から苗木を守っている。土地は校長先生個人のものだが、育った木は学校のものとして利用する。植林してから 5 年後に間伐を始め、薪として市場で販売し、売上は学校の経営費にあてる。10－15 年後には学校の机、椅子として加工する予定。学校では週に数回環境教育を行っている。低学年は植林地内で青空教室を開いており、児童には好評である。